

四門宗開門の因縁

聖四門／新村紘宇二

1. 私が、北海道札幌市で「醜醜」の原型に近い「ヤング young」という素晴らしい健康食品に出会ったのは、昭和 61 年の春でした。
2. その頃私は、ヒグマの栄養源である「熊笹」が、イネ科の植物であり、且つ万人が強精剤として認めている、「行者ニンニク」がユリ科の植物である事から、この両者を精製し、微粉末（パウダー）にしてカプセル詰めにし、「イネユリ」という健康食品を作り、製造販売していたのです。
3. 当時、私は「新村資源効率研究所」（略称 NSK）を設立して、省電（コンバインドセービングシステム）の研究と健康食品の研究に没頭していたのです。
4. そんな折、前記 1 の「ヤング young」に出会い、この「ヤング young」が、仏教の經典／大般涅槃經に出ている「醜醜」を目指して生産された事を知りました。
5. 真宗西本願寺門主の大谷光瑞猥下、門下の正垣一義先達が、「醜醜」が乳酸菌からなる食品である事を突き止め、正垣一義先達は、昭和 24 年国会にて「仏教原理の応用範囲」（乳酸菌の応用の重要性）について講演し、更に、翌年の昭和 25 年「寿命論と有効菌」と題して 2 回目の講演を行っている事などを知り、私は「醜醜」の研究に心血を注ぐようになりました。
6. そして、「醜醜」が乳酸菌から出来ている事には納得出来たのですが、どうしても納得出来ない事が一点だけあったのです。それは「乳から酪を」の「乳」が、光瑞猥下も正垣先達も、又全ての「醜醜」研究の先学者達の「乳」が「牛乳」を指しており、「豆乳」ではなかったのです。
7. 仏教は、「五戒」（不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒）を大原則としており、とりわけ「不殺生戒」は全仏教徒がこぞって遵守しなければならない「金科玉条」なのですが、大乘仏教が成立した頃には、すっかり遜色してしまい、「地獄の沙汰も金次第」となって、金持達が地獄に行きたくないの、自分達を救済する方便として、大きな船を作り、善悪を十把一絡げにして、極楽往生への「タダ乗り」を企んだのが「大乘仏教」なので、「醜醜」が出ている大般涅槃經も、所詮は大乘仏教經典であり、釈尊の「如是我聞」（釈尊の言った言葉を直接弟子が聞いたもの）とは一切関係ない經典で、それ程信を置けるものではないのです。
8. つまり、牛乳は牛の赤子がのむものであり、人間が横取りしてのむものではないので、私は、「醜醜」の元蘇は、先学者達がいうような牛乳でなく、「豆乳」であるはずだと確信し、「豆乳」での「醜醜」作りに専念したのです。
9. 「豆乳」は豆腐の素であり、大豆から作るものです。しかし、豆腐は「豆乳」の段階で「おから」と分別され、むしろ栄養分は「おから」に取られ、豆腐の方は余り栄養がないのです。この栄養のない豆腐作りの「豆乳」では、丈夫な乳酸菌は共生培養出来ないと思い「全乳」の「豆乳」を作ることにしたのです。
10. 上等の十勝大豆を、成分を飛ばさないようにして乾燥し、更に、成分を飛ばさないようにして微粉末・パウダーにしたのです。
11. その大豆パウダーに、私が北海道北檜山で発見した、人間の血液ペーハー（pH）と同じ pH7.4 の「天然水」（低温殺菌）を注入し攪拌し、100%大豆の生の「豆乳」を作ったのです。その 100%大豆の生の「豆乳」に各種乳酸菌を混入し共生培養したのです。
12. 単に各種乳酸菌だけでは、なかなか思うように共生培養出来なかったの、私は、酵母菌を入れました。この酵母菌を入れた事によって、なぜか！各種乳酸菌はものすごい勢いで活発に増殖し、濃厚な乳酸菌エキスが出来たのです。

13. 私は、これこそが本物の「醍醐」だと確信し、資本金一千万円で、有限会社 醍醐製菓を設立したのです。
14. 私が作った「醍醐」は、まず第一に、牛乳でなく 100%大豆の「豆乳」であること、第二に、注入する水は水道水でなく、人間の血液ペーハー(pH)と同じ pH7.4 の「天然水」(低温殺菌)を使用すること、第三に、各種乳酸菌だけでなく酵母菌を混入すること、第四に、加熱加減を微細にコントロールし、湯葉状の皮膜を厚くして、菌たちが逃れられるようにしたことです。
15. 今でも、私の作った「醍醐」こそ本物の「醍醐」であると確信しておりますが、この私の作った「醍醐」が、果たして「衆病皆除」の妙薬に値するものなのか！という問題です。私はこの「醍醐」エキスを濃縮にして、会員販売されている「ヤング young」と同じように、塩素の入っていない水や、味噌汁や、その他ありとあらゆる調理時に、味の素のように、ほんの一滴たらしめて食することを勧めたのですが、どうも私は、研究開発して作るのは得意ですが、売るのは苦手で商売採算が分からず、この「醍醐」のお宝も、現在お蔵入りの状態なのです。
16. そんな訳で、私は「醍醐」作りに心頭を滅却していた頃、仏教を知ったのです。それから段々自分でも恐ろしくなるぐらい、仏教にはまっていき、真剣に仏教僧になることを昼夜考え、ついに矢も楯もたまらず、出家するにいたったのです。
17. 私が出家したのは、52歳の時、平成4年春でした。あちこちのお寺を訪ねて「出家」を請いましたが、全て断られ、「寺男なら」と言ってくれたお寺さんが一軒あっただけです。私は止む無く「十牛舎」という草庵を作り、托鉢で糊口を凌ぎました。世間一般で言う「乞食坊主」です。小乗仏教の教え通り「雨安居」を守り、雨の日と午後 は托鉢をせず、午前中の9時頃から11時頃までの2時間厳守で、差し障りの無いよう「般若心経・摩訶般若波羅蜜多心経」を誦経しながら主に駅頭で乞食(こつじき)をしたのです。網代笠に「十牛舎」と墨書した乞食坊主を見たことがあればそれは私です。主に東海道線の駅頭で、雨の日を除き午前のみ托鉢していたのです。
18. 数年間、駅頭で雨の日を除き午前のみ托鉢した時間を除き、古本屋通いを続け、托鉢で得たお金(浄財)の殆どを仏教関係の書物や資料の購入に使ってしまいました。お陰様で多少の仏教勉強をさせて頂きましたが、なぜか「ひろさちや」先先の書物が読み易く、大変重宝させて頂きました。
19. しかし、勉強すればする程、現在の大乗仏教のおぞましが目につくのです。前記7の通り、たった五つの「五戒」(不殺生・不偷盗・不邪淫・不妄語・不飲酒)すら守らない、守ろうとすらない日本仏教に嫌気が差し、釈尊が修行したインド霊鷲山に行き、現地にある「祇園精舎」(日本山妙法寺・開祖藤井日達猊下)に挂錫し、釈尊が修行した霊鷲山に通い、釈尊と同じように霊鷲山の山頂で思いっきり空気を吸い、釈尊と会話をし、釈尊が座した洞窟に下って同じように座し、同じように釈尊と会話をしたのです。寺(祇園精舎・日本山妙法寺・開祖藤井日達猊下)に戻っては、藤井日達猊下の御霊と会話をし、日本仏教の無残さを訴えたものでした。
20. 大乗仏教の「悪辣」さは以下の通りなのです。不殺生戒等を守っていないのです。
 - ①釈尊は、「絹草をもって虚飾せず」を実行した人です。絹は生繭の蛹を殺して紡ぐのです。生き物を殺して絹糸を紡ぎ、絹衣を作るのです。日本の墮落僧侶達は、皆得意となって、最上の絹衣である金襴緞子の袈裟を纏って愉悦しています。又、若い牛を殺して革を剥ぎ、太鼓や靴や鞆にしては、それを自慢しては喜んでいきます。
 - ②肉食魚食を断ち、菜食に徹している僧侶は殆どいません。食肉妻帯を是とし、酒と煙草を常用し、小乗仏教の「真実」を「虚実」にして吹聴して憚らない。あまつさえ小乗仏教の「四諦八正道」を盗み歪め不偷盗の限りを尽しているのです。
 - ③「雨安居」を一切無視し、托鉢をせず、檀家に寄生し、葬式仏教をして高額な戒名料

をむしり取る。墓場を造営し、高額な墓地や墓石、供養料を掠め取る。

21. 私は、前記 20 の日本仏教を信じることは出来ません。こんな仏教では誰一人として救うことなど出来ません。織田信長が天台宗の総本山比叡山延暦寺を攻めましたが、その堕落さは今の方が遥かに酷いのです。その証拠が各宗派の空寺の数です。僧侶の生活の糧は「托鉢」であって寺という伽藍の経営ではないのです。今、日本では二万以上の空寺が蜘蛛の巣となっています。住職のなり手がありません。檀家がいらないから食っていけないという、とんでもない似非仏教の屁理屈です。
22. 本物の「釈迦仏教」は「小乗仏教・上座部仏教」であり大乘仏教ではありません。
23. 出家したい人は誰でもが出家でき、誰でもが沙門(僧侶)になれるのです。そうして本物の「釈迦仏教」の教えは以下のような教えなのです。
 - ①私物欲を持たない、私物欲を持ってはいけない。
 - ②私領欲を持たない、私領欲を持ってはいけない。
 - ③私腹欲を持たない、私腹欲を持ってはいけない。たった三つの「私欲の禁止」であり「私欲の昇華」の教えなのです。
24. 私物欲は、つまるところ、ことごとく自分の「私物」にしたいという欲望で、一人占めの独占欲の源泉となり、ふつふつと欲望が高まり、とどまるところを知らず、多生の「生命」も自分の「私物」にしたくなるのです。本物の「釈迦仏教」には「私物観念」はないのです。
25. 私領欲は、つまるところ、ことごとく自分の「私領」にしたいという欲望で、一人占めの独占欲の源泉となり、ふつふつと欲望が高まり、とどまるところを知らず、多生の「生命」が住む「大地」も、自分の「私領」にしたくなるのです。本物の「釈迦仏教」には「私領観念」はないのです。
26. 私腹欲は、つまるところ、ことごとく自分の「私腹」を肥やす為に横取りしたいという欲望で、一人占めの独占欲の源泉となり、ふつふつと欲望が高まり、とどまるところを知らず、多生の「生命」の生活の糧も、自分の「私腹」を肥やす為に横取りしたくなるのです。本物の「釈迦仏教」には「私腹観念」はないのです。
27. 生きていくということは、牧場主は「家畜」を売買しなくてはならず、漁師は「魚類」を売買しなくてはなりません。生き物も生きていくために殺さなくてはなりません。これを「煩惱即菩提」というのです。決して濫りに殺生をするのではないのです。「不殺生戒」とは、濫りに殺生することを禁止しているのであって、それは時間と時代と共に何れ解決できる問題だからです。家畜肉や魚肉類の代わりに植物肉が生産できる時代が来る、ということです。
28. 人間として普通の一家団欒、家族団欒を願うなら、私物欲、私領欲、私腹欲の三大私欲を、潔く捨てなければなりません。なぜなら、この三大私欲は、摩擦と軋轢と衝突の種を撒き散らすからです。結果は、喧嘩となり、抗争となり、戦争へと、災の輪は業火となり、全ての人類を、全ての生類を焼き殺してしまうからです。
29. そんな訳で、今一度心新たに本物の「僧侶」(人々の伴侶)と「僧伽」(道場)を目指して一念発起、「**神仏教 四門宗 天の川霊園/祖神廟**」を開門することにしましたのです。もちろん「伽藍」もなければ「墓所」もありません。大本山・総本山に相当する聖山は、銀河の星座である「天の川」であり、寺院霊園は、*net cemetery* の「霊園霊廟・寺院僧伽」です。
30. 3次元時代の「寺院僧伽」は、絢爛を誇る神殿でもなければ寺院でもないのです。地球の大地には限りがあり、権力の象徴でしかない神殿寺院、霊園墓所の独占は、もう許されません。無物で生まれた人間は、無物で死んでいくのが**正道**なのです。
31. 人々が**正道**に生き**正道**に死すことに気づかない限り、私達人類に未来はないのです。

合掌



神仏教

四門宗

極楽会

| 宗旨 | |
|------------------------------|---|
| 名称 | 神仏教 <small>しんぶつぎょう</small> 四門宗 <small>しもんしゅう</small> 極楽会 <small>ごくらくかい</small> |
| 高祖 | 神仏 sinbutu |
| 宗祖 | 聖 四門 hijiri simon |
| 宗祖俗名 | 新村 紘宇二 niimura kouji |
| 開教開門 | 平成 22 年 (2010 年) 7 月 7 日 |
| 聖川 | 天の川 |
| 場所 | 銀河 |
| 御本尊 | 父母 <small>ふぼ</small> / 御先祖様 <small>ごせんぞさま</small> / 祖神汎仏 <small>そしんはんぶつ</small> / 蘇摩天女 <small>そーまてんによ</small> |
| 照破呪言 <small>しょうはじゆげん</small> | 唵摩訶呪大破天咩 <small>おんま かじゆだいほ てんらん</small> |
| 根本法典 | 聖命法 <small>しょうみょうほう</small> |
| 教義 | 聖命法解義 |
| 八戒一 | 不殺生 |
| 八戒二 | 不墮胎 |
| 八戒三 | 不虐待 |
| 八戒四 | 不領得 |
| 八戒五 | 不独占 |
| 八戒六 | 不麻葉 |
| 八戒七 | 不肉林 |
| 八戒八 | 不贅沢 |
| 死訓一 | 人生は涅槃の道の一里塚 老い老い楽し死もて極楽 |
| 死訓二 | 捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ三世の川 |
| 死訓三 | 小義を以て生き 大義を以て死す |
| 死訓四 | 生前密葬・活仏往生 |
| 死訓五 | 安心死・尊厳死 |
| 生訓一 | 一日五回 背筋を伸ばせ 胸を張れ |
| 生訓二 | 一日四回 遣る気を起せ 鎬を削れ |
| 生訓三 | 一日三回 飯を食え 遠慮して食え |
| 生訓四 | 一日二回 面を洗え 牙を研げ |
| 生訓五 | 一日一回 尻を拭け 己で拭け |